

2025年4月27日復活節第2主日説教

使徒言行録 5章12a、17-22、25-29節

ヨハネの黙示録1章4-8節

ヨハネによる福音書20章19-31節

先週は、復活日の礼拝を、たくさんの皆さまとご一緒に捧げることができて感謝でした。コロナ禍がありましたので、わたしも4年目にして、やっと東京聖三一教会本来の礼拝に出席できたという感覚でした。

昨年の降臨節第一主日から聖餐式聖書日課は、新しい祈禱書の試用版のものを用いています。復活後の主日の聖書日課は少し変わり、旧約ではなく使徒言行録を代行して読み、C年の使徒書は、ヨハネの黙示録を続けて読みます（A年はペトロの手紙一、B年はヨハネの手紙一です）。このヨハネの黙示録は、一般的には有名ですが、礼拝で読まれることは少なかったと思います。また、「黙示」という言葉の元来の日本語の意味は、その漢字の通り「黙って示すこと」ですが、『聖書』の用語としては少し異なります。原語の意味は、「啓示」あるいは「開示」です。「黙示」と表記したのは、その表現方法をしているからです。その方法とは、本来人間にはわからない「天上のことがら」を、地上の人間に伝えるために、地上の言葉に置き換えて伝える（啓示、開示する）ということです。人間にわかる言葉に変換されているが、それは記号化（暗号化）であり、文章はそのままの通りの意味ではないということです。内容としては、善悪など二元論的な発想があり、いわゆる終末に関する言述が多くみられます（だから、いろいろと話題になる解釈が生まれます）。また、ヨハネの黙示録に関しては、いろいろな意味で『聖書（旧約）』を基にしていることも特徴です。

この黙示は、旧約にもあり「ダニエル書」が有名です。また「マルコによる福音書」13章も小黙示録と言われています。迫害が強くなり、預言活動のような明確な活動ができなくなったので、このような文学類型、表現形態が生まれたと一般的には言われますが、確かに、ヨハネの黙示録の背景には、本格的に始まりつつある、ローマ帝国による迫害があると思います。逆に、そこから考えると、内容的に解釈することが困難な文言が多いのですが、言おうとしていることは、明白です。最後まで信じる人は幸いである（黙22:7）ということです。その意味では、ヨハネ福音書、ヨハネの手紙と結論は同じといえます。またそれゆえにヨハネ文書にいれてもよいかと言われていました。内容的には解釈する部分が困難な文章も多いのですが、その結論を前提に読み、またパウロやペトロなど主だった使徒たちの次の世代の、1世紀末頃の教会の感覚、その一部を知るという意味で読むとよいと思います。

本日の福音書は、ヨハネによる福音書です。イエス様が復活され（ヨハネ20:1-10）、そのことをマグダラのマリアを通じて告げられていたにもかかわらず（ヨハネ20:11-18）、弟子たちがユダヤ人たちを恐れて家に鍵をかけ

てもっていたというお話です。後半部では、有名な疑いのトマスのお話も出てきます。

本日のお話は「**その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちは、ユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸にはみな鍵をかけていた**」(ヨハネ 20:19a)、このように始まります。自分たちが従い続けて来たイエス様が逮捕され、十字架刑で殺されたのですから、弟子たちが恐れるのも無理はありません。「**家の戸にはみな鍵をかけていた**」とありますが、直訳では、「戸(複数)を閉めていた」です。「みな」、「鍵」という言葉は原文にはありません。新共同訳では「鍵をかけていた」、口語訳では「戸をみなしめている」となっていました。「閉める」という言葉に「鍵をかけて閉める」という意味もありますので、「**鍵をかけていた**」と訳してかまわないのですが、「鍵」という言葉があるとないのでは、すこし意味が異なります。なぜならば、「**そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた**」(ヨハネ 20:19b)と続きますので、「鍵」をかけていたのならどうやって入った? と思ってしまうからです。また、「鍵」は、最小限の防御手段、最良の鍵をかけることから、守りは始まるなどと考えてしまうからです。

しかし、大切なことは、復活されたイエス様が、ユダヤ人たちを恐れてこもっていた弟子たちに会いに来てくださり、「**あなたがたに平和があるように**」と声をかけてくださったということです。そして、「**そう言って、手と脇腹とをお見せになった**」ことです。「手と脇腹」とはもちろん、十字架にかけられるためにくぎを打ち込んだと思われる手の傷跡と、死亡を確認するために兵士が槍で刺した脇腹(ヨハネ 19:34)です。イエス様が確かに肉体を持って死んだことを示す証拠です。しかし、イエス様は、復活されて、今、イエス様の方から弟子たちの目の前に現れてくださったのです。そして、さらに大切なことは、「**弟子たちは、主を見て喜んだ**」と恐れが一瞬にして、喜びへと変わったということです。これはお話としては不自然です。また人間の感情としても、恐れが一気に喜びへと変わるのかと疑問に思います。しかし、信仰とはそういう事柄ですとヨハネ福音書は教えているのです。イエス様を通して主なる神様への信仰に入った時、一瞬して世界が変わるのです。

復活日をお祝して今年も歩み続けているわたしたちが、本日、復活節第二主日の学びとする事柄はここにあります。ヨハネの黙示録が示している信仰が示す事柄も同じです。どんな恐れも苦しみも、イエス様に出会うとき、一瞬にして喜びに変わります。イエス様が復活されたからです。今も世界には、戦いや憎しみあいの中での悲しみや苦しみがあります。先週は、教会関係の方においても、その人を大切に思う思いに包まれながらも、悲しい別れがありました。しかし、だからこそ、主なる神様はイエス様を通して、その復活を通して希望を与えてくださったのです。その希望を喜び、確信し、示し続ける歩みをこれからも続けたいと思います。イエス様の復活を信じるわたしたちの信仰が、誰かを励まします。失望している誰かを励ますために、その歩みを続けたいと思います。